学生目線で伝える社会学部五十年企画展

劉　雪雁

二〇一七年は関西大学社会学部創設五十周年という記念すべき年であり、その記念事業の一環として、学部の歴史を振り返る社会学部五十年企画展が四月から関西大学博物館で開催された。社会学部のある第三学舎のあちこちに企画展のポスターが掲示されていたが、在学生のあいだでは企画展の認知度がなかなか高まらなかった。企画展のことをより多くの学生に知ってもらうために、担当していたジャーナリズム専門プログラムの履修生に記事を書かせることを考えた。

社会学部メディア専攻には多様な実習科目があるが、ジャーナリズム専門プログラム（以下ＪＰと略す）の歴史がもっとも長い。ＪＰは少人数でジャーナリズムを学ぶ実践的なコースで、学生は二年次と三年次の二年間をかけて履修するものである。私が担当していたのは、三年次の文章班だった。

ちょうど二〇一七年度に、この科目の内容構成とアウトプットの方法を改革した。以前は春学期、秋学期ともに学生たちがみずから関心を持つテーマを選んで取材し、記事作成していた。二〇一七年度から、春学期には社会学部やメディア専攻の行事や話題を取材し、記事にまとめて随時メディア専攻のFacebookページに掲載するという、よりニュース性を重視する授業案を導入した。その第一弾として、社会学部五十年企画展を取り上げることにした。

ＪＰ生はこの課題をもらってからまず関西大学博物館に行き、五十年展を見学してきた。その後の編集会議で、取材対象、質問項目について議論した。最終的に、展示物を逐一説明するより、より多くの人々、とくに学生たちに企画展を見に来てもらうように、学生目線で企画展の特徴と意義を示し、興味深いところをピックアップするという執筆方針を決めた。取材対象は、学芸員の熊博毅さんと企画に関わったメディア専攻の村田麻里子教授に絞った。忙しいなか時間を割いて学生の取材に丁寧に対応してくれた熊さんと村田教授に、この場を借りて御礼申し上げたい。

完成された記事「企画展でたどる社会学部の足跡　きゅっと詰まった半世紀」は、四月二七日にメディア専攻のFacebookページに掲載され、計834人にリーチした。

https://www.facebook.com/kandaisocialmedia/posts/850275711787243

この記事は、春学期の成果物である『メディア専攻新聞』にも掲載された。『メディア専攻新聞』はサマーキャンパス、そして秋に行われたメディア専攻の実習ガイダンスでも配布され、社会学部に関心を持つ高校生や、社会学部在学生の目に触れることができた。

企画展でたどる社会学部の足跡
～ぎゅっと詰まった半世紀

関西大学社会学部が2017年に50周年を迎えた記念事業として、学部の歴史を振り返る企画展「人と社会をみつめて――関西大学社会学部50年のあゆみ――」が関西大学博物館で開かれている。

博物館1階奥の年史資料展示室では各専攻の誕生秘話や歴史を記したパネルのほか、過去の時間割表や一期生の卒業証書、学舎増築の設計図などの資料が並ぶ。企画に関わった村田麻里子教授（メディア専攻）は「未来を考えるには、過去を知る必要がある。これを機に社会学部の歴史を多くの人に知ってもらえれば」と企画展の意図を語る。社会学部の学生や教職員に学部への愛着をさらに感じてもらうことがねらいだ。

パネルでは学部開設から現在までの変遷が写真とともに紹介されている。関西大学で1969年に起こった大学紛争では、設立からわずか2年の社会学部の学生がその先陣を切った。第3学舎のバリケード封鎖を捉えた写真からは、当時の血気盛んな学生の様子が垣間見える。

展示品の中でひときわ目を引くのは、社会学部2作目のポスター。1994年に発表したこのポスターには総合図書館前に立つ奇抜な姿の学生が描かれている。ロックテイストのベストにドラえもんの缶バッジやセーラームーンのマスコットを付けた、モヒカン頭の男子学生だ。さらによく見ると刀のようなものを背負っている。当時この斬新なデザインのポスターはかなりの物議をかもしたという。学芸員の熊博毅さんは「あのような格好の人が実際にいたかは別として、社会学部には色んな学生を受け入れる門戸の広さがあることを伝えたかったのでは」と分析する。

資料の収集やパネルの文章の執筆、校正は学部長の永井良和教授（社会学専攻）と村田教授が中心に行った。いざ資料収集を始めたときには、残っている学部関係の資料が少なく苦労したという。年史編纂室が保管していたものや各先生の研究室に眠っていたものを地道に集めた。熊さんは「普段は年史編纂室が単独で（企画展を）開催するが、企画から展示まで社会学部の先生方が熱心に関わってくれた」と話す。

企画展は2018年3月24日まで。開館時間は午前10時から午後4時。入館料は無料。日曜、祝日、大学が定めた休日は休館日となる。問い合わせは博物館事務室（06・6368・1062）。

なお、50周年を記念して第3学舎D棟2階ソシオホール横の展示スペースにも、写真パネルが展示されている。【JP生・森本ひなの】

メディア専攻新聞

企画展でたどる社会学部の足跡
ぎゅっと詰まった半世紀

関西大学社会学部が2017年に50周年を迎えた記念事業として、学部の歴史を振り返る企画展「人と社会をみつめて─関西大学社会学部50年のあゆみ─」が関西大学博物館で開かれている。

博物館1階奥の年史資料展示室では各専攻の誕生秘話や歴史を記したパネルのほか、過去の時間割表や一期生の卒業証書、学舎増築の設計図などの資料が並ぶ。企画に関わった村田麻里子教授（メディア専攻）は「未来を考えるには、過去を知る必要がある。これを機に社会学部の歴史を多くの人に知ってもらえれば」と企画展の意図を語る。社会学部の学生や教職員に学部への愛着をさらに感じてもらうことがねらいだ。

パネルでは学部開設から現在までの変遷が写真とともに紹介されている。関西大学で1969年に起こった大学紛争では、設立からわずか2年の社会学部の学生がその先陣を切った。第3学舎のバリケード封鎖を捉えた写真からは、当時の血気盛んな学生の様子が垣間見える。

展示品の中でひときわ目を引くのは、社会学部2作目のポスター。1994年に発表したこのポスターには総合図書館前に立つ奇抜な姿の学生が描かれている。ロックテイストのベストにドラえもんの缶バッジやセーラームーンのマスコットを付けた、モヒカン頭の男子学生だ。さらによく見ると刀のようなものを背負っている。当時この斬新なデザインのポスターはかなりの物議をかもしたという。学芸員の熊博毅さんは「あのような格好の人が実際にいたかは別として、社会学部には色んな学生を受け入れる門戸の広さがあることを伝えたかったのでは」と分析する。

資料の収集やパネルの文章の執筆、校正は学部長の永井良和教授（社会学専攻）と村田教授が中心に行った。いざ資料収集を始めたときには、残っている学部関係の資料が少なく苦労したという。年史編纂室が保管していたものや各先生の研究室に眠っていたものを地道に集めた。熊さんは「普段は年史編纂室が単独で（企画展を）開催するが、企画から展示まで社会学部の先生方が熱心に関わってくれた」と話す。

企画展は2018年3月24日まで。開館時間は午前10時から午後4時。入館料は無料。日曜、祝日、大学が定めた休日は休館日となる。問い合わせは博物館事務室（06・6368・1062）。

なお、50周年を記念して第3学舎D棟2階ソシオホール横の展示スペースにも、写真パネルが展示されている。【森本ひなの】

ポスターの説明をする学芸員の熊さん

博物館の外壁に掲げられた幕

新聞の「顔」作る
整理記者の役割

新聞の見出しやレイアウトは誰が考えているかご存知だろうか。それは「整理記者」という人たちだ。取材をして原稿を書く取材記者とは仕事内容が大きく異なる。取材記者が花形だとすれば、整理記者は影の立役者だ。

「記事を生かすも殺すも整理部次第」。整理部の世界では有名な言葉だ。マス・コミュニケーション専攻（現メディア専攻）の卒業生で、四国地方の新聞社で整理記者をする楠田涼樹さんは、「原稿の良さを生かせるような見出しとレイアウトを、僕たち整理記者が考えないといけない」と話す。

楠田さんによると、見出しは原稿の内容を自分なりにかみ砕いた言葉で表現する。基本的に11字以内が原則で、それを超えてしまうと情報量が多すぎるという。レイアウトを組む際、紙面に空白ができないように見出しの大きさを工夫したり原稿の字数を調整したりする。ニュース価値の高いものから低いものへと順に読み進められるように、つねに読者の視線を意識しながら作業しているそうだ。

紙……材はすべて自社でしているわけではない。特に地方新聞社の場合、記者の人数などの関係で遠方への取材は難しくなる。そのため、通信社から提供される原稿も載せている。毎日、通信社から送られてくる原稿や図表の概要を記した「朝刊メモ」「夕刊メモ」をもとにどれを掲載するか決める。当然同じ原稿を他紙も使用する場合があるので、整理記者は自社の味を出せるような見出しを練る。

楠田さんが働いている新聞社の整理記者は28人ほど。取材記者の人数とそれほど違わない。日々膨大な記事を処理するため、仕事量に対し人数が足りていないのが現状だ。そのため原稿内容の正誤を確認する校閲も、整理記者たちが行っている。

取材記者の場合、優れた報道を行うと表彰されることがあるが、整理記者の仕事が注目され評価されることはほとんどない。しかし、見出しとレイアウトは新聞の「顔」ともいえる。それを作っている整理記者が果たす役割は大きい。今後新聞を読む……

……提供される記事の仕組みを説明する楠田さん

服部桂客員教授
学術講演会

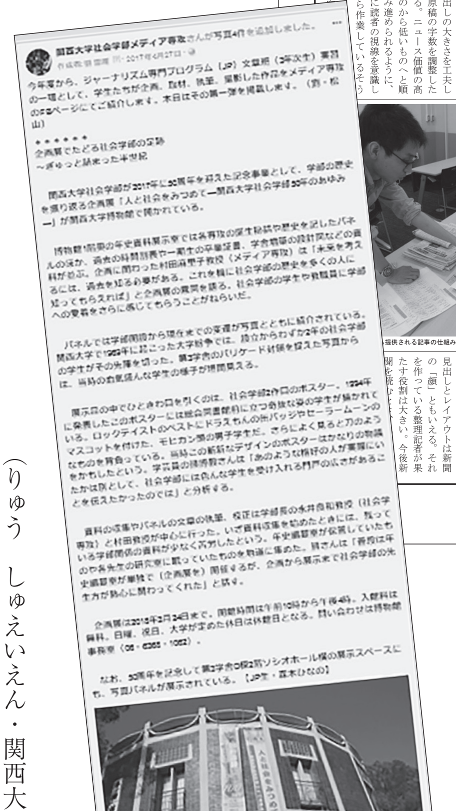
元朝日新聞科学部記者、関西大学客員教授の服部桂さんは6月6日、「〈インターネット〉の次に来るもの」をテーマに関西大学3学舎ソシオAV大ホールで講演した。デジタル・テクノロジーの力がますます大きくなる中、今後は「人間の疑問をどう持っていくか。人間力が試される」と指摘した。

講演の冒頭では、20世紀の人々が想像した「未来」の事例を取り上げながら、コンピューター、インターネットの歴史や社会に与える影響などについて説明した。そして、それぞれの時代における「ニューメディア」や、戦後の情報化の歴史も振り返った。

1990年代初期、日本ではまだ多くの人がインターネットを知らず、「『コンピューターウイルス』というものが何なのか、パソコンに触れて感染する病気のようなものじゃないよと説明することから始まった」と服部さんは記者時代のエピソードを語った。

講演の後半では、服部さん自身が翻訳した、雑誌WIREDの創刊編集者ケヴィン・ケリーの著書『〈インターネット〉の次に来るもの』（2016）を紹介した。同書で取り上げられた未来を読み解く12のキーワードを1つ1つ解説し、「個別のものに興味を持つことはいいのだが、全体像を考える科学的な方法が必要」だと指摘した。【春元唯】

『メディア専攻新聞』の紙面



関西大学社会学部メディア専攻さんが写真4件を追加しました。

今年度から、ジャーナリズム専門プログラム（JP）文章班（3年次生）実習の一環として、学生たちが企画、取材、執筆、撮影した作品をメディア専攻のFBページにてご紹介します。本日はその第一弾を掲載します。（劉・松山）

＊＊＊＊＊＊
企画展でたどる社会学部の足跡
〜ぎゅっと詰まった半世紀

関西大学社会学部が2017年に50周年を迎えた記念事業として、学部の歴史を振り返る企画展「人と社会をみつめて─関西大学社会学部50年のあゆみ─」が関西大学博物館で開かれている。

博物館1階奥の年史資料展示室では各専攻の誕生秘話や歴史を記したパネルのほか、過去の時間割表や一期生の卒業証書、学舎増築の設計図などの資料が並ぶ。企画に関わった村田麻里子教授（メディア専攻）は「未来を考えるには、過去を知る必要がある。これを機に社会学部の歴史を多くの人に知ってもらえれば」と企画展の意図を語る。社会学部の学生や教職員に学部への愛着をさらに感じてもらうことがねらいだ。

パネルでは学部開設から現在までの変遷が写真とともに紹介されている。関西大学で1969年に起こった大学紛争では、設立からわずか2年の社会学部の学生がその先陣を切った。第3学舎のバリケード封鎖を捉えた写真からは、当時の血気盛んな学生の様子が垣間見える。

展示品の中でひときわ目を引くのは、社会学部2作目のポスター。1994年に発表したこのポスターには総合図書館前に立つ奇抜な姿の学生が描かれている。ロックテイストのベストにドラえもんの缶バッジやセーラームーンのマスコットを付けた、モヒカン頭の男子学生だ。さらによく見ると刀のようなものを背負っている。当時この斬新なデザインのポスターはかなりの物議をかもしたという。学芸員の熊博毅さんは「あのような格好の人が実際にいたかは別として、社会学部には色んな学生を受け入れる門戸の広さがあることを伝えたかったのでは」と分析する。

資料の収集やパネルの文章の執筆、校正は学部長の永井良和教授（社会学専攻）と村田教授が中心に行った。いざ資料収集を始めたときには、残っている学部関係の資料が少なく苦労したという。年史編纂室が保管していたものや各先生の研究室に眠っていたものを地道に集めた。熊さんは「普段は年史編纂室が単独で（企画展を）開催するが、企画から展示まで社会学部の先生方が熱心に関わってくれた」と話す。

企画展は2018年3月24日まで。開館時間は午前10時から午後4時。入館料は無料。日曜、祝日、大学が定めた休日は休館日となる。問い合わせは博物館事務室（06・6368・1062）。

なお、50周年を記念して第3学舎D棟2階ソシオホール横の展示スペースにも、写真パネルが展示されている。【JP生・森本ひなの】

メディア専攻Facebookページのスクリーンショット

（りゅう　しゅえいえん・関西大学社会学部准教授）